

戸井田克己著：『大潟村物語－新生の大地・湖底のふるさと－』ナカニシヤ出版、2020年刊、159p., 1,900円（税別）

秋田県の大潟村は、かつて琵琶湖に次ぐ日本第二の湖であった八郎潟を干拓して造成された。本書は、かつて「モデル農村」と呼ばれた大潟村が、いかにして誕生し、今日までどう変化したか、減反政策が進展する中で、村民たちはどう生き、行動したかをたどることを目的としている。まず、本書全体の構成をみてみよう。

- 一 大潟村前史
 - 二 全国からの入植者たち
 - 三 開村当初の思い出
 - 四 新しき村への道
 - 五 減反政策のなかで
 - 六 「作る」ことから「売る」ことへ
 - 七 激動のなかを生きた人たち
 - 八 「青潮」がくれた入植地
- 補遺 国際化と日本農業－モデル農村・秋田県大潟村で考えたこと－

以下、章ごとに順を追って概要をみていくことにする。

一 大潟村前史

本章では、干拓前の八郎潟、干拓工事の推移、大潟村入植者の入植までの経緯などが説明されている。

二 全国からの入植者たち

大潟村への入植者は、選抜試験により厳選された。一次の書類選考、二次の筆記試験、そして三次の面接・作文試験によって入植者が決定した。第1期入植者56名は、倍率11倍を突破して1966年11月入植。そして、入植訓練所に入ってから1年間の入植訓練の様子が、資料に基づいて描かれ

ている。

三 開村当初の思い出

ヘドロの大地、大規模農業、大型機械を共同利用したグループ営農（大潟村では、これを「協業」と呼ぶ）、さらに「協業」から個人営農への変遷、入植者の社会生活、信仰などが取り上げられている。本章の「(三) 民俗の継承と創造」は、大潟村に関する従来の研究ではあまり論じられないことがない側面であり、地理学および民俗学研究者でもある著者らしい記述・分析となっている。

四 新しき村への道

大潟村入植者は、第1次入植から第5次入植まで計580名であった。そのほかに秋田県の県営事業による9名の入植者が加わった。本章では、大潟村入植者に対する厳しい入植条件について再検討している。

大潟村で生まれた非公式の「村民歌」、公式の村民歌「大潟村民の歌」、「畑作はやり言葉」を例に、大潟村入植者の建前、本音などの村民意識を取り上げている。

五 減反政策のなかで

米の増産を目的に誕生した大潟村ではあったが、全国で米余り、米の過剰在庫が問題化し、1970年、第4次入植で入植は一時中断した。1974年、第5次入植が再開され、各戸の農地配分が10haから15haに変更された。同時に、米の単作から田畑複合経営への政策転換が行われた。

この政策転換に対して、ヘドロの大地での困難な畑作を行うことに反対して不正規流通米、いわゆる「ヤミ米」を栽培する自由米派と、食糧管理法の下、国・県の指示に従う食管順守派（減反順守派）に大潟村は二分された。

大潟村に関して、新聞・テレビなど報道各社がもっとも関心を寄せてきたのも、二分された大潟村、とくに自由米派の動向であった。本書では、どちらかという食管順守派（例えば坂本進一郎

氏)の主張の紹介の方が多く、自由米派の主張に関するページ配分が少ないように感じられる。

かつて秋田大学に勤務し、大潟村の動向に注目してきた評者からみると(山下, 1987)、国の減反政策に反対し、「自分たちの米は自分たちで売る」ために、米集荷業者、大潟村あきたこまち生産者協会を設立した涌井 徹氏(涌井, 2007)などの例も取り上げた方がよかったのではないかと思われる。

六 「作る」ことから「売る」ことへ

大潟村でも、単に米を生産するだけでなく、売れる、安全でおいしい米を生産することが重要視されるようになってきた。

大潟村カントリーエレベーターに収穫した生籾の乾燥・保管・出荷・販売などを委託するだけでなく、収穫した籾の乾燥・調整さらに出荷・販売まで自らが行う農家もみられるようになってきた。

前述したように、農家がグループを結成して共同販売を行うようになってきている。本章では、大潟村カントリーエレベーター公社、大潟村農協の事業内容、役割などについて解説している。

しかし、大潟村カントリーエレベーター公社や大潟村農協への農家の依存度は、しだいに減少していった。このような中で、大潟村で米の生産・販売などを企業化した農家などについて、本章でも、もっと取り上げてほしかったと評者は感じた。

七 激動のなかを生きた人たち

本章では、二人の人物を取り上げている。ここでも、食管順守派の論客、坂本進一郎氏、そして自由米派から推薦されて村長選を勝ち抜き、女性村長として二期、大潟村の村長を務めた黒瀬喜多氏である。

八 「青潮」がくれた入植地

本章では、著者が進めてきたライフワークとも

いえる「^{あおしお}青潮」(戸井田, 2016)との関連において、本書の副題でもある「新生の大地・湖底のふるさと」について民俗学的な検討を行っている。青潮は対馬海流の別称であり、日本海側の地域一帯に、文化の一体性を醸し出す重要な役割を果たしてきたと著者はとらえている。大潟村も八郎潟があったからこそ、大潟村の生活と歴史が生み出されたことを、(一)新生の大地と青潮、(二)青潮と稲作、(三)青潮と民俗の順に論じている。

補遺 国際化と日本農業－モデル農村・秋田県大潟村で考えたこと－

この章は、著者が高校教師時代に執筆したもので、国際化時代の農業と、その教育のあり方を展望したものである。

以上、章ごとの概略を簡単に紹介してきたが、本書を読んで、全体として評者が感じたこと、考えたことなどを述べておきたい。

本書のもとになった大潟村における現地調査は、1992～2006年に実施されたものである。その後の大潟村の変容についても、1章を設けてフォローがあってもよかったのではないだろうか。

秋田支局に派遣された全国紙の新聞記者やテレビ局の報道記者は、大潟村関係のニュースを頻繁に取り上げる。なぜなら、彼ら／彼女らは、苦勞して作成した記事やニュースを、できれば全国版や全国ネットで報道されることを願うからである。それだけ、日本農業の将来を考えるうえでも、大潟村は注目度が高く、全国レベルの報道価値があることを示している。

本書においても、日本の他の地域ではあまり見られない大潟村ならではの米の生産・加工・販売の一体的な取り組みなどがされており、それらについて、本書でももっと取り上げれば、大潟村の特色がさらに浮かび上がったのではないだろうか。

とはいえ、評者自身もかつて、主に小学生を対象とした図書館用の本として、大潟村の誕生から、そこでの米づくりの変遷などについてまとめたことがある（山下，1997）。写真や図を多用しながらも、わかりやすく1冊にまとめることの難しさを痛感した。

著者自身が本書の書名の中に「物語」を用いている。その意味がよくわからないまま読み始めた。四六判、約160頁の読みやすい文章でまとめられた本書を一気に読み終えると、本書は大潟村の誕生から今日までの書名通りの『大潟村物語』であることを納得した。これからの日本農業の在り方を考えるうえでも、多くの方々に読んでいただきたい1冊である。

（山下清海）

文 献

- 戸井田克己（2016）：『青潮文化論の地理教育学的研究』古今書院。
- 山下清海（1987）：八郎潟中央干拓地・大潟村における農業景観と土地利用。秋大地理, 34, 19-26.
- 山下清海（1997）：『米づくりのむら－低地の農村に生きる人びと（ふるさとのくらし 日本のまちとむら4）』小峰書店。
- 涌井 徹（2007）『農業は有望ビジネスである！－新たな高付加価値産業になる時代』東洋経済新報社。